様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 １７ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２８２４

研究課題名（和文）アイヌ文化の基層と形成過程における古代日本文化の影響に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A Basic Study on the Influence of Ancient Japanese Culture in Substrate and Formation Process of Ainu Culture

研究代表者
蓑島　栄紀（MINOSHIMA, Hideki）

北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・准教授

研究者番号：７０３３７１０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、古代日本（とくに東北地方）の文化と、同時代の北海道文化・アイヌ文化との関係について、宗教や儀礼の側面から、具体的な比較検討をおこなった。特に、宗教・儀礼にかかわる金属製品や木製品などの分布や形態、機能について検討した。
　それにより、アイヌ文化における宗教・儀礼の道具の源流が、擦文時代やそれ以前に遡る可能性が指摘できた。また、古代北海道やその隣接地域における宗教・儀礼の痕跡が、交易や交流において重要な場所に多くみられる傾向を指摘することができた。

研究成果の概要（英文）：I conducted a comparative study on the relationship between ancient Japan (especially the Tohoku district) culture, the Hokkaido culture of the same era and the Ainu culture from the aspect of religion and ritual.In particular, we examined the distribution, form and function of metal products and wood products related to religion and ritual.
The religious and ritual tools of the Ainu culture could point out the possibility that there is origin in the Satsumon era.
Also, In ancient Hokkaido and its adjacent areas, it was possible to point out the tendency that religious and ritual traces are found in important places in trade and exchange.

研究分野：日本古代史・北東アジア史・アイヌ史

キーワード：アイヌ　エミシ　擦文文化　日本文化　宗教　儀礼　祭祀具　交易

１．研究開始当初の背景

かつて金田一京助は、アイヌ語と日本語のいくつかの単語の類似から、アイヌ文化の諸要素のなかに日本文化由来のものがあることを指摘した（金田一『アイヌの研究』1944）。また、折口信夫も、アイヌの主要な祭祀具であるイナウと日本各地にみられる削りかけ（削り花）の類似に着目し、イナウが日本の宗教文化の影響下に生まれたという仮説を示唆した（折口「花の話」『折口信夫全集』2、1995）。考古学者の石附喜三男は、アイヌのマキリ（小刀）の形態が古代日本の刀子と共通することを指摘し、8 世紀前後（アイヌ文化の祖先集団である擦文文化の時代）の北海道に対して移住者を含む本州文化の多大な影響があったことを推測した（石附『アイヌ文化の源流』1986）。文化人類学者の大林太良も、アイヌ文化における日本文化からの影響の可能性を諸方面から提起している（大林『北方の民族と文化』1991）。

以上のように、アイヌ文化と古代日本文化の類似点や、前者の古層に後者の残響を見出そうとする指摘は古くからあるが、それらの大部分は着想の段階にとどまり、実証的な裏づけを得るまでに至っていない。学術研究が細分化するなかで、上記のような関心にもとづく比較文化史的な研究自体が下火となって久しい。

しかし最近、この分野には新たな展開がみられる。本研究の分担者の一人である北原次郎太は、イナウについて、その形態や製作技法、用途などを厳密にトレースしつつ、日本や世界の各地の類似する事象との比較検討をおこない、現時点での研究成果を公刊した（北原『アイヌの祭具 イナウの研究』2014）。また、本研究の研究協力者の一人である瀬川拓郎は、考古資料・歴史史料だけでなく、伝承や民俗慣行をも視野に入れて、アイヌ文化のなかに古代日本文化の影響を探ろうとする、一連の精力的な研究活動を展開している（瀬川『アイヌの世界』2011）。

現在、北海道・東北における考古学的調査の進展によって、両者の交流の情報も含む膨大なデータが蓄積され、利用可能となっている。日本古代史や宗教史研究、祭祀考古学の成果などに照らしてこれらの史資料を見つめなおし、アイヌ文化と古代日本文化の関係を今一度解きほぐす作業を開始するための機は熟したといえる。

２．研究の目的

アイヌやその祖先集団と本州・日本の交流史に関する研究は、近年、歴史学・考古学およびそれらの協同によって、いわゆる「北方史」の一部として活況を呈している。しかし、それらの研究の大部分は政治的・経済的・社会的な問題に議論を限定している。これに対して本研究では、①両者の精神文化の交流の実態、②およびそれと表裏一体の宗教・祭祀等が交易・交流の進展に果たした役割、に迫ろうとする。こうして本研究は、民族誌的なアイヌ文化の基層およびその形成過程において、古代日本文化がどのように関与・影響したのか、あるいはしなかったかを、個別具体的な事例に即して検討・考察する。それは、アイヌ文化に対する本質主義的理解を廃し、その実態を歴史的・動態的かつ実証的に把握する試みでもある。

研究開始当初の具体的なテーマとしては、次の 3 点を掲げた。

（１）本州東北北部における木製祭祀具の様相

アイヌ文化における古代日本文化の影響を検討するに当たって、北海道と地理的にも近い本州北部～東北北部の様相の検討はきわめて重要である。そのことをふまえ、青森における平安期を中心とする出土木製品の検討を行う。2000 年代、青森市石江遺跡群の調査で多量の木製品が出土し、その位置づけをめぐって、古代日本の「中央」の祭祀・儀礼・精神文化が、列島の「周縁」「辺境」に及んでいた可能性をも視野に入れた論争が起きた。これについて、日本列島南北の比較・対比的な視座をも導入しつつ、小口雅史らを中心とする研究チームによってまとまった成果が出されたが、その後、五所川原市十三盛遺跡で同様の発見があり、石江遺跡群にはみられなかった「人形」の出土なども注目を集めている。本研究では、古代の東北北部における木製祭祀具の実態と意味を今一度精査する。

従来、青森における古代木製祭祀具は、主として都城や国府・官衙で出土する「律令的祭祀具」との異同・比較において論じられることがほとんどであり、イナウやイクパスイ（捧酒箸）のような、アイヌの木製祭祀具との具体的関わりを論じようとする研究はきわめて少ない。

また、これらの木製品のなかに、オシラサマなどの民俗資料と類似する例があることについても指摘されるが、それらの発言はいまだ印象論の域にとどまっている。

これら、時代も地域もさまざまな祭祀具について、形態だけでなく機能・用途・意味などを含めて、それらが真にどこまで類似し、あるいは相違するのか。類似（相違）するとすれば、その背景には何があるのか、等の問題を抽出し、整理する必要がある。これは、本研究の最終目的に迫るために不可欠の前提となる課題であり、本科研における重要な柱の一つとなる。

（２）日本列島北部における銅鋺、銅鏡、錫杖等の実態・用途・機能の基礎的研究

10 世紀前後、青森や岩手の集落遺跡では、しばしば銅鋺、銅鏡、錫杖などの製品を用いた祭祀の痕跡がみられ、宗教者の活動が想定されている。研究協力者の一人である井上雅孝は、北日本出土の錫杖状製品について網羅

的に検討し、雑密系の法具である可能性を推定するが、ここに北方系シャーマニズムの要素を見出す異論もあり（小嶋芳孝）、古代東北北部の民間宗教と祭祀具をめぐる議論はいまだ混沌としている。一方で、こうした製品は北海道からも出土例が増えつつある。同様の宗教・祭祀が、津軽海峡を越えて伝播・普及していた可能性と、その背景・意義が問われなければならない。すでに蓑島は、主として銅鋺を題材に、この問題について若干の私見を示したことがある（蓑島「古代北海道における太平洋側・内陸交通の実像」『日本古代の地域社会と周縁』2012）。古代北海道の「祭祀」と「祭祀遺跡」の実像を洗いなおす必要がある。

（３）北海道厚真町で発見された常滑壷とその歴史的背景の検討

近年、北海道厚真町で約 50 年前に出土していた陶器壷が、12 世紀半ばの常滑産陶器であることが判明し、平泉政権と北海道の関係や、ここに経塚が造営されていた可能性などを含めて、議論が活発化している。この常滑壷の問題そのものについては、これを主な研究対象とする別のプロジェクトがすでにあることを仄聞するので、本研究が直接的に正面から取り扱う対象とはしない。

しかし、仏教をはじめとする日本「中央」の宗教が東北社会にどのように浸透し、そこでどのように変容したか、さらにその北海道への伝播と独自の変容の可能性はどのようであったか、これらは本研究と関わるきわめて重要なテーマである。

永原慶二などによって、常滑陶器の流通と熊野勢力の関わりが示唆されていることも重要である（永原編『常滑焼と中世社会』1995）。近畿から東海～関東～東北・北海道をむすぶ交通・物流・交易と、宗教・宗教者との関係の可能性、さらにはそれらのヒト・モノの往来するルートの究明という問題が浮かび上がる。本研究は、この点の解明を一つの大きな目的とする。

ところで、アイヌ文化と古代日本文化との関係の実態は、列島中央から「周縁」への一方的な文化の波及を必ずしも意味しない。

日本古代に相当する時期、北海道に宗教・祭祀を含む「南から」の文化の大きな流れが押し寄せていたこと自体は、おそらく疑いない。にもかかわらず、北海道ではそれらの精神文化が独自の変容をとげ、地域差というゆらぎを内包しつつ、個性的な精神文化や信仰体系をもつアイヌの文化が洗練をとげていった。その内実は、個別具体的・実証的な研究を積み重ねることによって、はじめて明らかとなっていくであろう。また、アイヌ文化の源流の問題については、「南」の日本文化との関連だけでなく、「北から」の視点をも導入する必要がある。

以上のように、本研究は、アイヌ文化と古代日本との、双方向的・相互依存的な文化交流・変容のありようを展望しようとするものである。アイヌ文化のなかに普遍性と特殊性とを探ることによって、アイヌの歴史と文化を、日本史やアジア史、さらには人類の歴史・文化のなかに正しく位置づけることが可能となると考えられる。

３．研究の方法

本研究は、北海道・東北を中心とする各地でのフィールドワークを中心として実施された。年 2 回程度、考古資料・文献史料・民俗資料の実見・調査と、それとあわせた研究会議をおこなった。

研究組織は、日本史学・日本考古学およびアイヌ文化の研究者を中心として構成した。研究協力者として、古代日本（列島中央）・東北・アイヌの宗教・民間信仰、祭祀具や儀礼文化に造詣の深い研究者や、各地の祭祀に関わる遺跡・遺物を調査した担当者を招き、本研究の遂行に必要となる最新の知見を広く収集・吸収することを目指した。研究の過程では、研究遂行上の必要性に応じてゲストスピーカーを招き、議論を深めた。民俗学などの研究者からも意見を求めた。

このように、アイヌの歴史・文化、古代東北の歴史・文化、古代日本とアジアの歴史・文化等、広い専門分野にわたる研究者を集めて、同一の史資料や歴史事象を注意深く観察することに努めた。幅広い専門分野にわたる研究者を一堂に集めて、同一の史資料や事例を検証・精査することで、通説をこえた新たな着想と、それらを総合した複眼的な歴史叙述をもくろんだのである。

また、アイヌ文化や北海道をフィールドとする研究者の目で、本州東北北部や、日本の「中央」の物質文化・精神文化を調査し、あるいはそれらの逆をおこなうことで、これまでよりも深く厚みのある議論が可能となり、多くの新たな視座や着想を得ることができた。

さらに、祭祀・宗教行為および宗教者と、交易・交流との関係という視角を中心的な研究課題の一つとした。これまでの古代・中世の北方史研究においては、交易・交流が、宗教・儀礼や精神文化との関わりで論じられることは、きわめてまれであった。この点を検討対象としたことは、本研究の重要な着眼点であり、独創的な点であるといえる。

４．研究成果

（１）2015 年度の調査・研究

2015 年 9 月、青森で全体研究会および巡検調査を実施した。日本古代の祭祀・宗教および儀礼具、民族誌的なアイヌの祭祀・宗教および儀礼具についての総論を提示することで、研究チーム内部で基本的な事実関係や認識を共有し、当該研究課題を具体的に深めていくための基礎となる視座を得ることがで

きた。
　また、五所川原市十三盛遺跡や青森市新田（1）（2）遺跡における 10-11 世紀頃の発掘調査成果、とくに木製品、祭祀具について、発掘調査担当者の協力のもとに、遺物に即した検討をおこない、豊富な情報を得て意見交換をおこなうことができた。さらに、北日本の古代祭祀に関わりの深い錫杖状鉄製品や出土文字資料、漆器等についても議論を深めた。
　11 月には札幌、厚真、平取、白老にて古代・中世の遺物調査および近現代の民具調査をおこなった。調査の結果、研究分担者の笹生によって、北海道には、すでに続縄文文化後半期に遡って、本州古墳文化の祭祀と関連する遺物のあることが指摘された。このことで、当該研究課題は、少なくとも 5 世紀に遡って検討すべき必要性があることが認識された。
　あわせてアイヌ協会の主催するカムイノミ（神々への祈りの儀礼）、シンヌラッパ（祖先祭祀）にも参加した。それによって、儀礼における献酒行為の重要性や、その際に用いる儀礼具の形態や意味について考察を深める必要性が再認識された。
　2016 年 3 月には、列島北方地域との比較史的視点を得るため、鹿児島での調査を実施し、古代隼人の社会・祭祀・葬送の実態および古代日本との交流に関して多くの知見を得た。
　研究初年度において、古代北日本、とくに平安期の青森の木製品・祭祀具について、発掘調査担当者からの多大な協力を得て、いくつもの重要な知見を得ることができたことは大きな成果であった。また、擦文期の北海道において本州の祭祀・儀礼との接触があった可能性は、先行研究においても指摘されることがあったが、古墳時代の倭系祭祀が続縄文期の北海道と接触・交流し、影響を与えている可能性は、当該研究によってはじめて着想され、今後の成果の期待できる新視点であるといえる。

（２）2016 年度の調査・研究
　2016 年 7 月、北海道江別市の北海道埋蔵文化財センターにおいて資料調査を実施した。発掘担当者からの助言を得つつ、千歳市美々 8 遺跡、千歳市ユカンボシ C15 遺跡から出土した、続縄文期～擦文期～中近世にかけての考古資料のうち、木製品を中心に、多数の資料を調査した。とりわけ、続縄文文化期～擦文文化期に遡る可能性のある祭祀具（イクパスイとされる資料などを含む）を数十点実見し、検討できたことは大きな成果である。これらの資料の具体的な用途・機能などを、後世の民具資料や民俗事例との比較検討を通して、歴史的・具体的に把握するための議論を深めることができた。
　また、道埋文センターに近い江別市の「北海道式古墳」（後藤遺跡）を現地踏査した。
　さらに、平取町、恵庭市において、多数のアイヌ民具および続縄文～擦文期～中近世の考古資料、遺跡を調査した。擦文後期の祭祀遺跡である可能性が指摘される平取町カンカン 2 遺跡の立地や、付近のチャシとの位置関係を現地踏査により確認した。これにより、前近代のアイヌ（あるいはその祖先集団）の祭祀行為を、周辺環境および景観のなかで具体的にイメージすることができた。
　2017 年 2 月、長崎県での現地調査を実施した。大村市竹松遺跡で、列島内外の貿易陶磁器や、宗教・儀礼に関わる製品などを実見調査し、担当者からのコメントを得つつ議論を深めることができた。また、佐世保市門前遺跡に関して、同様の資料群を実見調査した。
　さらに、古代・中世において、南西諸島から列島北方地域まで流通した滑石製石鍋の主産地である西彼杵半島の西海市ホゲット遺跡を現地踏査し、多くの知見を得た。これらにより、列島周縁地域の国際交流と宗教・儀礼の関係について多大な成果が得られた。このことは、列島北方地域およびアイヌの交易と宗教・儀礼のかかわりについても、比較検討の材料として、重要な参考事例となった。
　北海道の古代～中世の木製品の調査・検討は、本プロジェクトの「本丸」ともいうべき中心的領域であり、計画当初から詳細に検討することが必須であった。これについて、2 年間で北海道および本州北部の古代祭祀具、あるいは祭祀に関連する可能性のある木製品の大半を実見・検討することができたことは大きな成果となった。
　古くは続縄文後半期に遡る時代から、民俗例の祖形としての木製祭祀具が存在していた可能性を改めて確認することができた。そうした資料について、本州の祭祀具の研究者や、アイヌの民具や伝統文化の研究者などを交えて、実物を手に取りながらの活発な意見交換を行うことができた。それにより、本州北部における類例や、民俗事例との比較検討において、いくつかの具体的な論点や課題を抽出することができた。
　さらに、こうした祭祀の場、祭祀具の出土地点が、いずれも交流・流通の要衝であることをどのように考えるべきか、問題が明瞭になってきた。この点については、「西」「南」の九州や南西諸島における古代・中世のアジア的交流の状況からも、比較検討すべき多くの示唆を得ることができた。

（３）2017 年度の調査・研究
　2018 年 2 月 10 日に北海道厚真町での遺物調査を実施した。宇隆 1 遺跡出土の 12 世紀代の常滑産陶器壺を観察し、平泉との交流の可能性や、祭祀遺物としての評価に関して意見交換した。上幌内モイ遺跡出土の炭化イナキビや、破砕され被熱した銅鋺、五所川原産須恵器などを観察し、擦文期の儀礼と、同時期の本州北部の儀礼、民族誌的なアイヌ文化の儀礼との異同について検討した。さらに、オニキシベ 2 遺跡出土の刀剣類、玉類・銭貨や、スタンプ文をもつ漆器、上幌内 2 遺跡出

土の刀剣類ほか、12 世紀代の秋草双鳥鏡（コイル状鉄製品と共伴）などを調査し、本州・大陸双方との交流とその背景・意義について意見交換した。

翌 11 日-12 日には北海道大学アイヌ・先住民研究センター（札幌市）を会場として総括研究会を実施した。11 日には、厚真町の約 10 年間の発掘調査のうち、特に祭祀・儀礼にかかわる考古学的事例が報告され、意見交換した。また、北海道出土の木製品に関する年代測定の事例報告がなされた。

12 日には個別テーマの研究報告と意見交換をおこなった。古代の列島北方地域における祭祀・儀礼に関する遺物について、先行研究をまとめ、錫杖状鉄製品、銅鋺、コイル状鉄製品などの出土状況を集成し、それらの遺物の機能や、分布の意味などについて意見交換した。さらに、古代東ユーラシアにおける交易商人と仏教とのかかわりや、中世九州の在地社会における荘園と仏教信仰との関係、近世蝦夷地における場所経営と祭祀・信仰とのかかわりに関する報告がなされた。

以上によって、前近代のアイヌ・北方地域においては、交通・交流・交易の要衝に祭祀・儀礼の痕跡が多い傾向が明瞭となった。また、今後のさらなる研究の進展のためには、いささか抽象的に用いられがちな「祭祀」・「儀礼」の概念について、機能論や行為論の視座からの具体的な検討をふまえて、より明瞭な概念規定をしなおす必要性が指摘された。

現時点では、アイヌの固有信仰の形成・展開における古代日本の祭祀・儀礼との関係について、ただちに断案を示すことはできない。しかし、以上の 3 年間の研究成果によって、今後の研究の方向性を探るうえで基礎となる多くのデータが収集され、いくつもの新しい論点や着眼点を得ることができた。当面の次なる目標としては、今回得られた調査データとその検討結果を整理・分析するなかで、「アイヌ文化の形成と基層」における祭祀・儀礼と、交流・交易とのかかわりの具体的なメカニズムについて、いくつかの仮説的な見通しを提示し、検証することが期待される。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 15 件）

① 北原次郎太、アイヌの動物変身譚における「第 3 の変身」について、口承文芸研究、査読無、41 巻、2018、29－45
② 蓑島栄紀、北海道/北方世界、日本研究、info:doi/10.15055/00006927、査読無、57 巻、2018、169－180
③ 笹生　衛、神道考古学から祭祀考古学へ―最近の祭祀遺跡研究から見た古代祭祀の実態と神観―、國學院大學研究開発推進機構紀要、査読有、10 巻、2018、5－9
④ 北原次郎太、異界と人をつなぐモノたち、季刊民族学、査読無、162 巻、2017、75－82
⑤ 北原次郎太、アイヌ文様は魔除けか－衣文化に付随する通説を検証する、北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要、査読無、3 巻、2018、1－18
⑥ 蓑島栄紀、『日本古代の自他認識』をめぐる覚書－田中聡氏の所説をめぐって、歴史科学、査読無、228 巻、2017、39－47
⑦ 蓑島栄紀、『日本書紀』の「問菟の蝦夷」と太平洋沿岸交流、日本歴史、査読無、827 巻、2017、 36－39
⑧ 北原次郎太、アイヌ口承文芸に見るシャマン儀礼の再検討、口承文芸研究、査読無、40 巻、2017、 36－49
⑨ 田中史生、越境する古代、歴史評論、査読無、799 巻、2016、6－16
⑩ 田中史生、国際交易と列島の北・南、古代東ユーラシア研究センター年報、査読無、2 巻、2016、111－127
⑪ 三上喜孝、古代の境界意識・対敵意識と仏教信仰―九世紀の日本海側諸国における四天王法をめぐって―、出雲古代史研究、査読無、25 巻、2015、49－68
⑫ 笹生　衛、神の籬と神の宮―考古学からみた古代の神籬の実態―、神道宗教、査読有、238 巻、2015、19－57
⑬ 笹生　衛、祭祀の意味と管掌者－５世紀の祭祀遺跡と『古語拾遺』「秦氏・大蔵伝承」―、季刊考古学、査読無、別冊 22 巻、111－121
⑭ 笹生　衛、神殿の成立と神観・祭祀、季刊悠久、査読無、141 巻、2015、37－52
⑮ 北原次郎太、《覚書》ikupasuy の口舌型式再検討、千葉大学ユーラシア言語文化論集、査読無、17 巻、2015、103－134

〔学会発表〕（計 2 件）

① 田中史生、国際交易と列島の北と南、専修大学東ユーラシア研究センター2015 年度第 2 回シンポジウム、2015 年 11 月 7 日、東京都千代田区
② 北原次郎太、花とイナウ―東北からアイヌ文化を考える、遠野文化フォーラム、2015 年 8 月 23 日、岩手県遠野市

〔図書〕（計 7 件）

① 田中史生、蓑島栄紀　他、古代日本と興亡の東アジア、竹林舎、2018、557（田中 7－14、同 401－427、蓑島 503-534 を分担執筆）
② 小口雅史、蓑島栄紀、三上喜孝　他、古代国家と北方世界、同成社、2017、380、（蓑島 62－95、三上 318－339 を分担執筆）
③ 鈴木靖民、田中史生、蓑島栄紀、三上喜孝　他、日本古代交流史入門、勉誠出版、

2017、573（田中 3－18、蓑島 323－338、三上 353－365 を分担執筆）
④ 田中史生、越境の古代史、角川ソフィア文庫、2017、234
⑤ 田中史生、国際交易の古代列島、角川選書、2016、253
⑥ 笹生　衛、神と死者の考古学　古代のまつりと信仰、吉川弘文館、2016、232
⑦ 蓑島栄紀、「もの」と交易の古代北方史－奈良・平安日本と北海道・アイヌ、勉誠出版、2015、363

５．研究組織

(1)研究代表者

蓑島　栄紀（MINOSHIMA, Hideki）
北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・准教授
研究者番号： 70337103

(2)研究分担者

三上　喜孝（MIKAMI, Yoshitaka）
国立歴史民俗博物館・研究部・教授
研究者番号： 10331290

田中　史生（TANAKA, Fumio）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号： 50308318

笹生　衛（SASO, Mamoru）
國學院大學・神道文化学部・教授
研究者番号：　60570471

北原　次郎太（KITAHARA, Jirota）
北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・准教授
研究者番号：　70583904

(3)研究協力者

瀬川　拓郎（SEGAWA, Takuro）
札幌大学・歴史文化専攻・教授

井上　雅孝（INOUE, Masataka）
岩手県滝沢市埋蔵文化財センター・主任主査

原　京子（HARA, Kyoko）
法政大学大学院・人文科学研究科・博士後期課程

奈良　智法（NARA, Tomonori）
北海道厚真町教育委員会・学芸員

鈴木　和子（SUZUKI, Kazuko）
青森県埋蔵文化財調査センター・調査員

藤原　弘明（FUHIWARA, Hiroaki）
青森県五所川原市教育委員会・学芸員